

LEON- TODO

N-ro 8



1953

DECEMBRO

ENHAVO

NI FUNEBRAS - Morto de s-ro Einar Adamson	----- 2
Gratulon por Geedziĝo de du junaj gesamideanoj	----- 3
おもいで ----- (3) アリス・ヨシハル	----- 4
Pri la pupeto nomata "Kokeŝi"	Noboru Hayakawa ----- 9
アメリカ航海の日記から	高橋達治 ----- 11
ある友人からの便り	中沢天眼 ----- 17
モスクワの J. V. スターリンズの公開状	朝比賀昇訳 ----- 19
イスパラントと平和運動	ブルダルドルフ (チェコ) ----- 22

Aldono ----- Informo (reporto) de H.E.L.

p2. 大分に参加して 星田

Ni Funebras

Lastatempe en " Heroldo de Esp. " oni anoncis pri la forpaso de s-ro Einar ADAMSON, Svedujo.

Li estis tre fervora 40-jara esperantisto kaj agadis por nia afero kiel komitatano kaj ĉef-delegito de UEA, sekretario de TEJA (Tutmonda Esp. Ĵurnalista Asocio) kaj aliaj. Precipe post la mondmilito li etendis sian manon por helpi nin, orientanojn, kiuj submetitaj pro la pasinta mizera milito. Multaj japanoj, inklusive niaj asocioj en Otaru, ricevis de li tre valorajn varmajn esperantaĵojn, librojn, gazetojn aŭ aliajn diversaĵojn.

Ni aŭdis ke li suferas je kormalsano, tamen la sciigo de lia morto efektive atakis nin. Ni perdis en li ne nur nian gravan subtenanton sed neforgeseblan gvidanton. Nia sveda granda stelo falis ! Li naskiĝis la 14-an Majo 1894 kaj mortis la 11-an Junio 1953. 59-jaraĝa.

Ĉe la fino ni esprimas sinceran kondolencan al la lasita familio, s-ino Elma Adamson kaj f-ino Inga Mai Adamson.

Estro de Otaru Esperanto-Asocieto

D-ro Isamu Yamaga

I Yamaga

Gratulon por Geedziĝo de s-ro H. KODAMA
kaj f-ino H. ISIZUKA

En la lasta novembro ni ricevis tre ĝojan
sciigon ke s-ro H. Kodama en Sapporo edziĝis
kun f-ino H. Isizuka.

Kompreneble tio estas unu el la plej benataj
favoroj, kiun nia Dio de Amo ofte donas al
sinceraĵ geesperantistoj.

Estas sendube ke ili plie kunlaboros por nia
afero, ĉar ili estis unuiĝitaj per nia kara
lingvo.

Ni tutkore gratulas ilin kaj preĝas al Dio
ke Li gvidu tiun novan verdan hejmon.

Estu benata kaj prospera ilia amo !

Ilia nova adreso :

Kita 12-zyō Higasi 2-tym.

Nisimura-Humio kata

Sapporo-si

も子供が好きなこと、ニッポン人は親切なことなど話してくれた。

昼食後 S-ro P. Pavlov はわたしにいろいろと話かけてきたが、殆んどしゃべれないわたしは、パヴロフさんの助け舟を何ぞうも何ぞうも繰り出してもらって、ようやく頼りないエスペラントで外人との初めての会話をやったのだった。

パヴロフさんは立派な大きいサイン帳を用意しておられて、内外の有名な新旧 Samideanov の氏名や短い句が色々な形で沢山サインされていた。特に多いのはニッポンからシベリア経由ヨーロッパに行く途中、ハルビンに立ち寄って、パヴロフさんを訪ねた人々のものだった。その日にわたしも何人かの筆蹟の中に、まずい筆蹟を著き残したのだったが、いまは S-ro P. Pavlov も生死不明で、あのすばらしいサイン帳もどうなつたことやら……全く惜しいことだ。

2度目に訪ねたときも S-ro Kio といつたが、そのときも大変よろこんでくれて狭い食堂兼応接室で、ロシアのお菓子をつまみつまみ紅茶をのみながら、S-ro Kio と S-ro P. Pavlov のユカイそうな話を聞いていた。

この日のロシア人の紅茶の飲み方をおもしろいと思つたのは、ニッポン人なら紅茶に甘く sukero を入れてのみ、そのほかにまた甘いお菓子をたべるのだが、彼等は紅茶には sukero を入れずにお菓子の甘さで間に合せ、サトウ草しの紅茶をのみことだった。

その3度目に訪問したときは2階の狭いベランダに、もしニッポン人なら引越荷物用の木ワケや石炭、マキなどの置場にしておるような狭いベランダに小さいテーブルやイスを持ち出して、紅茶を入れてくれたことがあつたが、その時の紅茶の入れ方もわれわれニッポン人にはめずらしいものだった。当日の客を交えて5人のコップのうち自分の分にまづ濃い紅茶を入れて、それを5人分に等分して、サ湯を注ぎ足し、一杯にふやしてゆき、ジヤムやケーキで飲むことだった。

なお、われわれからみて意外な飲み方は彼等はいわゆる紅茶チヤワンを使わず、ビール、サイダーなどに使うガラスコップの大きいのに熱い紅茶を入れて飲むこと。熱いのを冷やすときはコップのせいのソーサーにうつし入れて、さましてそのまゝ飲むことでどうもニッポン人からみると汚らしく感じることであった。わたしたちもいまでは紅茶はコップで飲むようになってしまった。

S-ro P. Pavlov は赤系ロシア人だということだったが、共産主義は嫌つていた。Sovjeta 本国に強制移住させられて行つたが、すでに70近かつたから、もちろん生きてはおられないだろう。Esperanto にはとても熱心な青年のような気分を持った人だった。

8. 緑と赤

Revuo Orienta 誌 11月号の三宅史平さんのオ40回日本エスペラント大会の印象記を読んでいて、「……中立主義のわたしさえ、のちにはその中立のゆえに二・二六事件以後、朝の目ざめに、おお！ さようも無事であつた。と思つたことがいくたびあつたことだろう。現実に、あの純粋の「学究」である川崎君さえが、

数ヶ月
月4日
たつて
ことを
間待た
るうち
寒い
つた。
朝鮮人
め一晚
いよ
スペラ
まくは
ミも出
をふく
ツ。」と
驚出来
の仲間
たされ
3〜
つた。
感じや
そのと
見もし
たもの
当時
なこと
さてど
ちよ
ると話
の人た
わたし
察あて
かまえ
スペラ
だろう。
驚され
名はアカ

数ヶ月をブタ箱にすごしている……」というところを読みながら、昭和17年3月4日の夜、北満四平街市のある劇場で映画 お琴と佐助を見ながら長い気分におたつていると、突然木戸まで急用で呼出されて、刑事に引立てられていったところのことを思い出した。留置場前の廊下に突立ったまゝ、理由のわからないまゝを数時間待たされていた。この間にも巡査とエスペラントについて話したり、宣伝しているうちに夜が来てその夜は留置場にとめられてしまった。

寒いヘヤで、一晩中留置の理由を考えてみたが、わからないまゝ夜が明けてしまった。そして翌日もまたとめられて、3日目に出されたが、そのとき同室していた朝鮮人から、あなたは刑事にいろいろとたてついたでしょう、だからこらしめのめ一晩だけいに入れられたのですヨ。巡査がそう云ってましたよ、話してくれた。

いよいよ出されるとき別室で一人の巡査から次のようにしかられた。「キミはエスペラントをやってる相だな」「ハイ！ もう10年近くやっていますが、仲々うまくなりません」「最近、奉天で満州エスペラント大会というのがあるそうだが、キミも出席するつもりかね？」「エー！ そりやあ、もちろんですヨ」とうれしさに胸をふくらませて答えた。とたんに「ナニッ！ 何がもちろんだ。もちろんとは何だッ。」とドエライけんまくでどなられてしまった。わたしは間近にせまった大会に出席出来る楽しさで答えたのだが、先方は赤の会合に出ることを楽しみにしている赤の仲間の一人と見たのだろう。あすエスペラントの本を全部持って来い、と言われたされて家に帰えされた。

3〜4日後に本をもらいに行くと、持って来て置いたまゝの形で床においてあった。わたしにとっては大切な本が土足に汚れた床に置きざりにしてあるので気が臭じやない。まだ置いとけといわれて、それから2週間後に再びとりに行ってみた。そのときも初め届けたときのまゝの姿でほこりまみれになって床においてあった。見もしなかつたのだ。彼等には何もならない物でもわたしには命から2番目に大切なもの、やっと許されてゴミをはたいて大事に抱えて帰った。

当時の満州日日新聞に、「あまり皇室をほめると右翼だといわれるし、社会主義的なことをいうと左翼にとらまれる、だからだまっていると自由主義者といわれる。さてどうしたらいいのか」と出ていたことがあった。

ちようどいまごろ、世界の平和を唱え、エスペランティストは平和の希望者であると話したりするとおれは左翼がかっているといわれ、平和運動に協力しないと赤の人たちからあいつは右翼だといわれるのと同じようなものだ。

わたしが留置場にはうり込まれたのは、二・二六事件後、大連警察から四平街警察あて、わたしを取調べるようにと電報が入ったので重大犯人か赤とでも思いつかまえたのらしかった。大連では大連エス会の機関誌 AKACIO に「大連警察とエスペラント」という記事など書いて呼出されたりしたので注意人物になっていたのだろう。取り調べのとき、機関誌の名の AKACIO (アカッーオ) は変更せよと注意された。AKACIO はアカシヤのことで赤には何にも関係ない名であること。呼名はアカッーオでも中味は緑なのだと説明したが、ためだ「アカチーオ」をやめて

「クロチーオ」とし、毎号名前を変えたらどうかということで KUROCIO というエスペラントはないという、イヤ！アカチーオでは困ると聞き入れてくれなかった。

その結果 LA UNUA, LA DUA, LA TRIA, ---- と毎号名前を変えてやろうかこれなら発行号数もわかるしと考えたが、それつきり機関誌は出さなかった。この大連警察でのあれやこれやが因で、大連警察がタイホ命令を出したのだろうと思っただが、大連警察に出向いて理由をたずねた結果は、わたしの親しい同志 S-ro Tan-Sa が赤だからとかで緑のわたしがつかまっていたというわけ。

そのご、S-ro Tan-Sa と新京であつたとつかまっていたことを話すと、それはご迷惑かけましたネ、わたし自身は何の取り調べもうけなかったのにネと大変気の毒がついていたが、S-ro Tan-Sa はいま Hiroshima でエスペラント普及、緑化の運動のため懸命に努力している人である。旅順工大生時代に赤の仕事を手伝ったかどで一年、malliberejo の生活を送ったが、この malliberejo の中でエスペラントを学び、すっかり verdigi されていまでは完全な verdiginto である。

このように戦前、戦時中は Esperantisto は赤く見られていて集会などもうろさかった。わたしの妹たちもその友から「あなたのお兄さんはエスペラントをやっているから赤でしょう」とよく云われたそうだ。当時の世間は緑即赤とみていたのである。

北京のわたしの後輩の Sim-Ya 氏から「あなたは国際的なエスペラント普及に努力しているので、同じ国際的な共産主義の運動には理解してもらえと思うから協力してほしい」との手紙をもらったが、その返事に「エスペラント普及も共産主義も国際的な運動であることに変わりはないが、Esperanto はその標識が示すとおりの緑の星でどこまでも平和を希望するのに反して、共産主義は赤の星でいつも闘争を希望しているので両者の主張がまる反対だからわたしとしてはサンセイ出来ない」と書き送ったことがある。

われわれ Esperantisto はいつも国際中立で、世界平和、緑のなごやかな思想を広めることにのみ努力をしたいと切に希望するので決して一方的に片寄りたくはない。

国際性をもつ Esperanto だもの Esperantistoj の中に赤もあり黒もあって何の不思議はないのに malnova samideano の中には未だににらまれることをおそれて会合などに出ようとしない人もあるようだが、おそれていては世界の Esperantigi、緑化はできない。

ただ、再び警察当局が緑即赤といった見方をするようなことがなければ良いかとそれをおそれる。また、そんな気持ちを相手にあたえるような言動があつてはならないと切に望むばかりである。



Antaŭ
japanan
dankon.
la antaŭ
ridetas.
ribi nen
ribas iom
Kiel no
kate aŭ
as certe
nur nair
La "Kok
ĝija" de
intermon
aŭ pleto.



Tajirō-Stil



Pri la pupeto nomata "Kokeši"

Noboru H. Ikawa

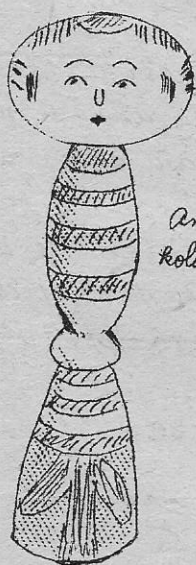
Antaŭ kelke da monatoj, mi donacis al franca samideano japanan pupeton nomatan "Kokeši", kaj ricevis de li grandan dankon. Laŭ lia raporteto, la pupeto estas starigita sur la antaŭbreto de lia libroŝranko ĉiutage. Pro tio mi ofte ridetas. Tamen mi nun bedaŭras, ke mi ankoraŭ ne povis skribi nenion al li por enhavigi la etaĵon. Do, mi ĉi tie skribas ion pri ĝi.

Kiel nomata "Puplando", ĝen estas multe da pupoj, delikate aŭ naive manuskriptitaj en Japanio. La "Kokeši" estas certe unu el la lastaj, sed nia intereso al ĝi estas ne nur naira sed simpla.

La "Kokeši" estas faritaj de la lignaĵistoj nomataj "Ki-ĝija" de antikva tempo. Ili estas tiuj, kiuj loĝis en la intermontaj vilaĝoj kaj fabrikis ujojn kiel ligna tasego aŭ pleto. Ili estas multe nomitaj S-ro Ogura (小椋, 小倉) aŭ

Satō (佐藤), kaj antaŭe ili ne volis edziĝi aŭ amikiĝi kun najbaraj vilaĝanoj kiuj havis aliajn profesiojn.

Laŭ la skribaĵo pri ilia familia deveno de nun mi skribas legendon pri fondo de japanaj lignaĵistoj. Antaŭ mil kaj pli jaroj, Princo KORETAKA (惟喬親王) de la 55a Imperiestro Montoku ekretirigis entiu ĉi vilaĝo kun siaj vasalaroj en intermonta Vilaĝo Ogura (小椋郷), Ŝiga Prefektejo pro la surtroniĝo de sia pli-juna frato. Iun tagon, ekpensan-



Tajirō-stilo



Tōkatta-stilo

Ambaŭ
kolorigitaj



二二一

1日前の今
辺り、海の静け
さを思い、やか
をもあける心持
で追うようにみ
て見えますよ」
驚き、「ほら、
ていたのだが、
の様々な空想を
めているものは
が姿を表した。
車室が一杯であ
船会社の曳船か
るのも大都會の
の投錨位置が
されぬ像を見た
せた。

それから G
入るあたり、霧
きり浮んで来て
そこで s-i
いなかった。一
間にアメリカの
主義者がいるこ
もまで出来ない
在港時間が少い
が。移民官の検
査向し、共産主
りするのである
しても、こんな
に応じて Yes,

li inventis la tornilon, kaj ordonis du arbohakistojn fari lignajn pletojn. Kiam tiuj estis bone faritaj, la princo tre ĝojis eldirante, ke "tio estas japana trezoro sendube, ĉar tio fariĝos anstataŭe por neglazurita argilaĵo kiel mangilaro." Kaj, li certigis ilin por la fondintoj de la japanaj lignaĵistoj, kaj nomigis la unuan "Micujoŝi Ogura" (小楳光吉), kaj alian "Hisajoŝi Huĝiŭara" (藤原久良). Antaŭ #360 kaj pli jaroj la idoj de M. Ogura komence transloĝiĝis al la suda parto de la nordorienta regiono de japana ĉefinsulo, kaj poste ili pli kaj pli disvastiĝis en tiu ĉi regiono, kie nun la Kokeŝi estas plej multe faritaj.

La signifo de la vorto "Kokeŝi" estas por mi malfacile komprenebla. S-ro Rjōkiĉi Mihara iam klarigis, ke "ko" en "Kokeŝi" signifas "ligno", kaj "keŝi" signifas "deskrapita"-n. Tamen, ĝi estas iom racia, bedaŭrinde.. Mi ankaŭ konsideris pri tio, ke la vorto porus deveni de "ĝokiso" (御器所), t. e. fabrikejo por Diaj ujoj. Tamen, ankoraŭ nun mi ne poras aserti.

Laŭ S-ro R. Mihara, en dialekto de "Kokeŝi" troviĝas tri sistemoj. La unua estas "Kokeŝi-systemo", la dua estas "Hōko-systemo", kaj la lasta estas "deko-systemo". Pri tiuj krom la unua, mi ne poris altuŝi pro mia okupiteco. Mi nur skribas, ke la vorto "Kokeŝi" estas plej vaste komprenebla por ĉiuj japanoj.

Iam S-ro Tarō Nakamura skribis, ke la "Kokeŝi" antaŭe porus esti la kredobjekto por la lignaĵistoj. Mi ankaŭ interesas en ĉi tiu vidpunkto, tamen mi ankoraŭ ne havas materialojn por tio.

Pri la stiloj de la "Kokeŝi", la sama folkloristo konigis min du. La unua estis nomata la "Tokkatta-stilo" (遠刈田派), kaj la alia estis nomata la "Tajirō-stilo" (彌次郎派).

Bonvole vidu la stilojn antaŭparte.

— Fino —

アメリカ航海の日記から



高橋 蓮 治

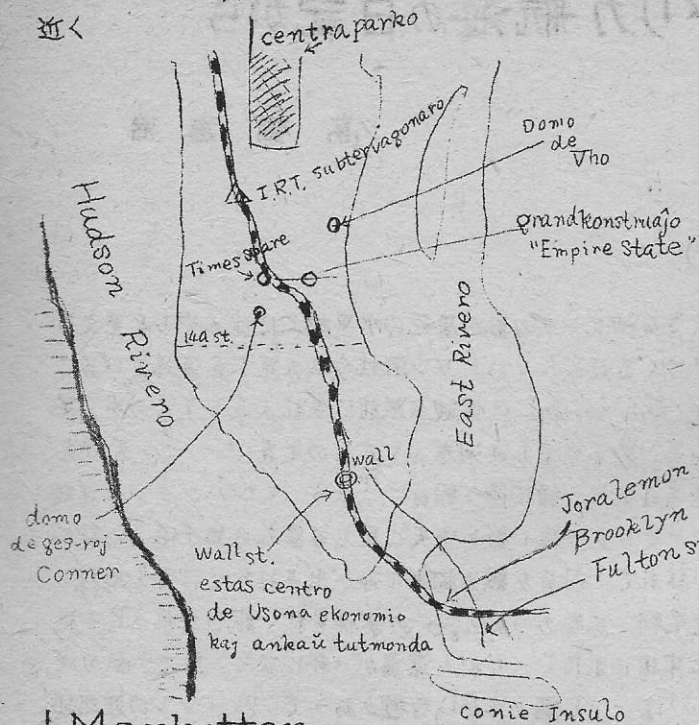
ニューヨーク (その一)

1日前の今頃は、コニー島附近の大きな油タンクの影が灰色の水平線上にぼんやりと見える切り、海の静けさと、ぽつぽつあらわれてくる灯火に、ハドソン河は今私の足下を流れていることを思い、やがて *Granda Urbego, Novjorko* の偉観が眼前に表れようとするのを、足をもあげる心持で期待していた。そうして、めまぐるしい河岸のネオンの光を、一つ、一つ文字を追うようにみつめてみたり、岩壁繫留作業を私と一緒に待つ船員に、「ほら、マンハッタンの建物が見えますよ」と指さされ、突然眼頭にそそり立つ黒い影と中天に見える星ならぬ千億の灯影に驚き、「ほら、自由の女神ですよ」といはれて、船首左舷の舷窓に浮び出された女神像を凝視していたのだが——一夜の幕が解け放たれた早朝、其等の *imaĝo* の実体を見、眠れなかった一夜の様々な空想を現実抱きしめようと上甲板に出た。しかし濃霧が一杯に立ちこめて、私の求めているものは未だ皆として見えない。「ぼー」と霧の中から音響があつて、ハドソンの連絡船が姿を表した。二階建て、上が船客室、下が乗用車室である。上がガランとしていて、下の乗用車室が一杯である事が *nica* なこの市民の生活の一端を示していた。やがて *Moran* 曳船会社の曳船があらわれた。二種類の船彩色が西部のそれらに比して重厚な濛い色で配されているのも大都会の落着きを示すものであろうか。転錨がはじまると、私はすぐ船橋に上つた。昨夜の投錨位置が *Bedloes* 島のすぐ傍であつたので、この時やうやう「自由の女神」の被いかくされぬ像を見た。徐行する左舷に女神のかかえもつ自由憲法の大冊が数々の厂史的事件を想像させた。

それから *Governer's* 島(監獄があるので有名)を右舷にし、*East River* (東河)に入るあたり、霧も全くはれてマンハッタンの *grandaj kaj altaj konstruaĵo* がくっきり浮んで来て、私の視界を中空まで抑えていた。午前9時ブルックリン17埠頭につく。

そこで *s-ino Corner* からの *respondo* を期待したのだが、どうしたものか到着していなかった。一刻も早く、この大都会の土をふんでみたかったのだが、私の船が南を走っている間にアメリカの対外国船員態勢が変つて来たのでそれが出来なかった。要するに船員の中に共産主義者がいることを警戒しはじめたので移民官の検査が厳重になり、私達の上陸はその検査が済むまで出来ないことになったのである。焦々しながらどうにもならず大切な時間の浪費をした。在港時間が少いのに出来れば今日も一度 *samideo* の誰かに会いたいと思つていたので、移民官の検査というのは船のサロンで船長から船員のはしくれまで一人ずつ、身元について質問し、共産主義団体に加つたことがあるかと聞いたり、アメリカ国法に従うことを宣誓させたりするのである。彼のしやべる英語を本当に理解するものもないのだし、又共産党員であつたとしても、こんなときに私は共産主義者で上陸せぬでもよいなどというものも居らず機械的に順序に応じて *Yes*, といったり *No*, といったりするのだから全然無意味である。全員検査終了した

のが午後の三時で、川橋と略同緯度のこの街では早くも夕陽が傾いていたが例によって船員の仕事（日本からの荷物を陸揚げする）を出し抜いて Joralemou 街に躍り出た。この通りに間近



Manhattan

の入荷達だが、私はそれでも人混みを求め、軽い大地の反響を足下に感じながら元の街へ歩いていった。

“何処の港え？”と乗船の水夫が尋ねた。“Baltimore え”。私の答はうつろだったかも知れない。又頭の上をその数十階のビルの灯火がちらついてそして今度は前と反対の方向に流れた。24時間前にここに入港し、たった三時間の上陸でもうこの港を去つてゆかねばならない。すべての灯火が皆後々後々と流れ遠のく。暗い、寒いハドソンの河口をもう通り抜けた頃であろうか。機内はもう全速力、そうして船は私の満たされぬ思いをのせたまゝ一途に南へと走っているのだ。

ニユーヨーク

1953. 1. 5.

“再びニユーヨークに向う”——海の暗さと、港の冷たさにすっかりつまらなくなっている心には、それが、再び私自身を支える希望になっていた。

5日午後5時半、ハドソン河口水先船碇泊地に着く。夕闇が次第に迫り、行達した2万5千トンのアメリカ号の灯火が、もはや明瞭である。

やがてブルックリン病院の灯がけんらんと映じて来た。船橋に上つて二等航海士さんと“又ニユーヨークですね……”などと話していたら、船長が“高橋君、今度はゆつくりできるね？”と声をかけてくれる。——本当に3日間ゆつくりできるのだ——船長が斯う云ってくれる以上、在港3日はもう確実——。そう、自分にいい聞かせると、再び現れて来た自由の女神や

高いマンハッタンのもろ胸算用をはじめ

る！——
7時、前と同じ

に机の上につてい

近く Brooklyn では一番賑やかな Fulton 街がある。その新聞屋で地図を求め、とある herbejo の Benko に腰を下して S-ino Conner や S-ro H. Smart の adreso を地図と首っ引きに探したが、その附近に UEA の deligito が居ないことを知って途方にくれた。その時もう薄暗くなり、映画館の看板がネオンと無数の灯をかがげはじめ、人々が忙しそうに私のそばを通過していった。ロスアンゼルスにこりて無謀に自動車や地下鉄を乗り廻すことは差ひかえて Conner さんらを訪問することもやめた。

ともかく船乗りにとってはしつかりとして揺れない大地が懐しい。私の前を通過しているのは黒と白の二様

親愛なる高橋

私達はおか

居ります。

事務所に御

ここは北

のです。

心からの

12月30日附
た思いである。そ

ることも明確にな

八時頃再びフ

のような言葉の癖

とにかく日数も

Ges-roj

地図はもう、
か茶けるだろうと
でもあり、案外

Jeralemon
貧弱なもので公
に入りこむので

いな、美しい通
ない。私はまご

ことにした。ま

人がその前に行

10セント2枚を

nej と書いて

立っていない。

の方に手を少し

高いマンハッタンの konstruajo をふり仰ぎながら、忽ち、3日間の行動予定についてそろそろ胸算用をはじめた—— 今度こそ、あのきらめく灯の中でのんびり羽を拡げることが出来る！——

7時、前と同じ17埠頭に着く。すると、今度は S-ino Conner からの手紙が入待ち額に机の上にのっていた。

12月30日

G. アラン・コーナー

D. タパン・コーナー

親愛なる高橋君、

私達はあなたの手紙を受取り、あなたが米国に無事到着されたことを知って喜んで居ります。もし、ニューヨークに数日も居ることができるとしたら、どうぞ私達の事務所に御出で下さい。又、電話番号 CH 2-2315 で電話することもできませう。

ここは北アメリカエスプラント協会の事務所であり、且つ又、私達の家庭でもあるのです。

心からの挨拶と期待とを以って

12月30日附だから、きつとパナマからの手紙を受取られたのであろう。とにかくほつとした思いである。それに予期通り S-ino T. Conner が S-ro D. A. Conner の夫人であることも明確になったので嬉しかった。

八時頃 再びフルトン街からジエラルモン街を歩き、途次夫人に電話した。F-ino H. Wolf のような言葉の癖はないが、早口で、ききとれない所があった。

とにかく日数も三日あることであるし、と、明日を期待しながら寐につく。

Ges-roj Conner

1953. 1. 6.

地図はもう、大略理解できた。地下鉄の動きも察しがつく。—— ニューヨークの街をも何とか歩けるだろうという自信があった。しかしこの自信（臆測？）は意外に簡単に遂げられたようでもあり、案外そうでなかったときもある。

Jeralemon 街の片隅にある subway (地下鉄) の入口は街の寛大さに比べると余りにも貧弱なもので公衆便所か何かと間違えそうであった。それでも朝の九時、人々がぞろぞろとそこに入りこむのでそれに間違いないことをやつと認めた。絢爛(?)たる日本の東京は三越地階みたいな、美しい通路はない。装飾はそこに入つてゆく人々の衣裳だけだった。おまけに切符売場がない。私はまごついた。しかし突嗟の場合後からの老婦人のしりについて、その人のまねをすることにした。まづうすぎたない妙な小さな ojo があり、一人の男が坐っている。つかつかと婦人がその前に行つて、たしかに50セント出した！ すると男が25セント一枚5セント一枚10セント2枚を婦人にやった。〈なるほど！〉私がその ojo の上をみたら Change Money と書いてある！ すぐ私も金を変えた。右を曲ると入り口があり、誰も（切符切りが）立っていない。ところがその婦人が通るとき、ガラリとその十字形の柵が開いた。そういえば右の方に手を少しやったようである。それで私も、と、つかつかとそこをいつてみたら、金を入れる

細長い式があげている。電話箱と同じだと思って、すぐ金を入れた。バス賃はどこでも10セント位だったし、10セントの形は一番小さいので10セント入れた。ガタリとその柵が90度廻って私の尻がしたたかたたかれ、私の体は一步前進した。尻は痛かったけれど此で成功！——といった具合である。To Manhattan と To Down Town に柵内が分れている。勿論矢印にそうて上り、柵内えゆく。やはり *Norjorkeo* にもラッシュアワーというのはある。相当の混みようであつた。その *ragono* の約半数の乗客が立っている。しかし東京でのような柄の悪そうな挙措容姿をする者は居らず、例えば大方の *s-roj* が帽子(ヘルメット)と手袋をつけている。Wall 街停車場で大半が降車するが、*ges-roj Conner* の *Officejo* は十六番街だから14番街停車場まで乗った。

十四番街の停車場は広くて(勿論まだ地下)売店やアメリカ式の *restracio* があつた。然し West 116 番地を求めるには其上した電車の進行方向に対してそのまゝ左にゆけばよいであろう。十四番街はずつと商店が並んでいる。ふと四つ辻にかけられた番地名からやがて West 116 に近づくことを知った。まもなく West 116 と書かれた戸口の前に立つた。ところがそこが洋服屋であつたので私はいささか驚いた。*ges-roj* は此処に住っているのかしら? 或はこの二階かもしれない。とにかく入りこんで四十がらみの店主にここが北アメリカエスプラント協会かと尋ねた。するとこのおやがさんはかなり禿げた頭をかきける。E. S. *peranto*? *Conner*? すると、そばにいた若い女客が横槓を入れた "Are you a Spanish?" かなり自信のついた聲の私の英語はスペイン人のしゃべる言葉に似ていたらしい。"Esperanto is the international language and I ask you where is the North America Esperanto-Asociation." と私は愈の為に *Jarlibro* の *adreso* 頁をあげて示した。すると女がいつた "This is 14th Street, and the asociation is in the 16th!!" "Oh!!" 私は思はず声をあげた。西にだけ歩いて北へ二通り上ることを忘れていたのだから。

5分後私はその大きな *apartamento* の前に立っていた。門の右柱に、幾つかのベルがついていて、その一つに "Esperanto Conner" と書かれてあつた。ベルをおす。すると反対に玄関のベルがなった。勝手に入れという信号だったのだろう。しかし私はわからず、もう一度おした。すると若い *s-ro* が二階から下りて来た。"Bonan tagon" とその人が挨拶される。"Ĉu vi estas *s-ro Takahashi*?" 導れて二階に上る。階段もみな絨繻、手摺も壁も模様でかざられ天井は高い。室の入口の戸も立派なもので *f-ino Wolff* の家とは大分違っている。"Bonan Tagon, *s-ro Takahashi*," 外套もとらないのに、*s-ino Conner* が私を愛想よく迎えてくれた。*s-ro Conner* も出て来られる。挨拶をして握手したとき、突然 *s-ino Conner* が余りにも美しいのでいささか度臆を抜かれた。此んな事を申上げるのは失礼かも知れないが、私は亦だ此の人より美しい人にあつた事がない。本当に美人型で、その手を *premi* したとき *saluto* の気持以外に私の対女性観がぐらついたのを、たしかに感じた。*s-ro* が大きな安樂椅子を指さして *Sidiĝu* といはれる。*s-ro Conner* の家はきつと室が三つなのであろう。*Pordo* のそばに料理室など、それに今私の坐っている事務室それから奥の私室。事務室は意外に小さい。机が四つあり、*s-ino* と若い *s-ro* それに御近所の *s-aninoj* が手伝つて仕事して居られる。*s-ro* は早速私の *marvojaĝo* について尋ねられる。航海がきわめて *agrabla* だった事、シスコやロスで *ges-anoj* から世話になったことなど話した。それからこの市でのエス運動状況を尋ねた。明瞭なエスプランティスト数はわか

らないが次第に盛に出され、"この *vi mem presas* れいに印刷されていまは出来ません"を見せた。"日本人が彼の *Malsano* した"夫人が横槓 *ano* は幾分赤いかにここで *Kunv* と口をきられ、そのは各派別に甲論乙論仲裁するのに大変なといふところできうことばうなづけがいわれ、一つのほ小型一事務用、*masino* には違 *jaĝo* などが *reli* 構造にできている姿難をいつも心配みせられた。この *organo* ができあがるわけであるの本はどこにあるの中にあつたので

s-ino Con もう午後一時にも地図を前にして教のポーチまで送つたことは他人に決まても純情で愛想かさを求めてその三日間のこの新しい *restracio* 売店、簡易食堂も *stomako* 歩いてゆこう。タ街から40番街街はアメリカの北

らないか涙がに盛になりつゝあると答えられた。"American Esperanto Magazine"を出され、"この雑誌は私達が編輯し 私達が印刷するのです"といわれた。"Ĉu vere vi mem presas?" すぐ私は問い返した。その雑誌は mempresado にしては普通の程きれいに印刷されているのだから。"日本でも各地区運動で mempresado をしますがこんなふうましくは出来ません" "そうでせう" S-ro はつと立ち上つて隣の机の上にあつた "Samideano"を見せた。"日本から来た雑誌です。S-ro Nakagaki を知っていますか。" "会っていませんが彼の Malsato en Riĉa Rikolto" 等で知っています。"あの本なら私もよみました" 夫人が横からいわれた。"しかしねえ、私はこの雑誌は余り好きませんよ。Samideano は幾分赤いからだ"。それについて S-ro はエスペラントの中立論をのべられる。"今月10日にここで Kunveno をやるのですが——あなたは残念ながら10日には居れないですね——"と口をきられ、その Kunveno で samideanoj がとてもよくしゃべつて、しかも彼等は各派別に甲論乙駁するのでとてもうるさくて、——(S-ro は頭を柳文顔をしめる)それを仲裁するのに大変だといわれる。(ここら辺り S-ro の言葉は熱をおび、とても早口になり Sed、というところできれるだけが私を安心させる) 先程の雑誌がここで mempresado されるといふことがうなづけないのでそのことをたづねる。Vi povas vidi la maŝinon ĉi-ro かいわれ、一つの ilo の方へ私を導かれた。机の上に skribmaŝino が三つあつた。一つは小型-事務用、一つは中型-事務用、そして最後の一つは他と大分構造が違つていた。Skribmaŝino には違ひないが、原紙をうつ力はすべて elektriĉo でなされ、しかも fotografaĉo などが klisto ができるような装置と、打つた文字の各線が左右端とも上下にそろつような構造にできている。"2000ドルもするのですよ" と S-ro かいわれた。"高価で小柄ですから娯楽をいつも心配するのです" S-ro が笑はれる。若い S-ro がスイッチを入れて作動してみせられた。この "skribmaŝino" で書かれた原紙を輪転式の印刷機にかけるとあの美しい organo ができるのである。Klisto 用印刻を他に頼む他一切この小さな oficejo でできあがるわけであるから羨ましいかぎりだ。S-ro が libro-listo を一部下さつたのでそれらの本はどこにあるのかとたづねたら、私の後の戸棚を開けられた。成程、きちんと蓋のある戸棚の中にあつたので私はこれが書棚であることがわからなかつたのだ。

S-ro Conner 自身の "Conner Course" が一番たくさんあつた。時刻が打過ぎた、もう午後一時にもなろうか、お仕事も忙しそうだったので、市内の見物に値するような場所な地図を前にして教えて頂いてからおいとしました。S-ro がわざわざ腰のあるその apartment のポーチまで送つてくれて、さきほどの中立論で幾分他人を攻撃されたときもあつたが、こんなことは他人に決していつてくれるなど 念をおされた。やつぱりエスペラントをやる人はどこまでも純情で愛想がよい。快よく時間を過ごしたことを感謝し、説明された 42番街附近の賑やかさを求めてそのまゝお別れした。

三日間のこの街の見学のためにはいささか金不足のむきもあつて、この街での昼食は Luksa なる restracio で無駄使いしないようにと決め、とある drug-store (藥、小間物、日用品、商店、簡易食堂もついている) に入つて kuko と kafo を求めたが、20セント分で私の小さな stomako にはそれで充分足りた。Stomako が充ちると私の piedo はこのまゝ北に歩いてゆこう。名も知らぬこの街の片隅を見ながらゆこうといいだした。Wall 街の高いビルの街から 40番街までめだつて大きな konstruaĉo はないが、それでも大い十階近く。この街はアメリカの他の街とも全く異つた様相を示している。とにかく立体的であるということだ。

他の街ならばそこに住宅街があり、かしこに商店街あり、又他の場所に事務所街があるというように全く平面的な観察をすることが必要だ。しかしこの街の場合、地下に *trinkejo* や *teatro* があり、地階に商店あり、二階に住宅あり、三階に事務所あり、102階にテレビジョン発信局ありと思っていればよいであろう。日本の東京のように *moderna konstruaĵo* と *dometet-aĉoj* が共存しているようなヘマな手ぬかりは決してない。

エムパイヤスツツの *granda konstruaĵo* の頂きが近寄りすぎて見難くなる頃には私の周囲はさすがに賑やかに“世界一の大都”の中心であることを認めさせずにはいなかった。*Los Angeles* のようなけばけばしい配色はみられず数十階の重みをぐっと抑えている地階の商店街が私のすぐ横にあった。人々の服装もウィンドの装飾もこの重厚感をそこねはしなかった。

名所めぐりは明日の予定に残して、ニューヨーク最大といわれる劇場 *Radio City Music Hall* に入った。ここは東京でいえば日劇などに相当する所であって、スラリとした美しい踊り子の織りなす歌の調べやわけのわからぬ男の歌もさることながら、休憩時間に休憩室に下りたとき、そこがあまりにも広く *klasiko* な装飾に包まれ、私の足下の絨氈があまりにも厚いもので雲の上を歩いているような感じをうけたとき驚異を感じた。

Times Square の目のさめるような *lumo* の中をさまよってみたりして、歩きすぎて疲れ、帰り電車の中で眠りこけ、終点で車掌に起された失敗もあったが怪我もなく9時帰船。めまぐるしく一日の様々な印象が私の脳中を駆けめぐってやはり今夜も眠れない。

(後記。8日午後 *Norjarke* を離れた。しかしその日午前再び *ges-roj* を訪ねて *elkon-danko* をのべたが、その際、16-a H.E.L. Kongreso の写真をもつてゆき、*Hokeaido* のエス運動も少しお話しした。*S-ro Aizaŭa* の名を *S-ino Conner* は御存知であった。尚、*S-ro Conner* は二回日本に来られたことがある由。*S-ino* も日本に是非ゆきたいといつて居られた。御出でになつたら何とか歓迎したい。文中“若い *S-ro*”及び近所の“*mal-juna samideanimo*”のお名前を忘れて大変失礼に思います。神戸の宮本新治氏がよく御存知なので次回に再び記すことにしませう。)

Malfacila Prononco

三石氏と一緒に十一月のニセコ山頂に上った。歩きながら会話を出来るだけエスペラントでやった。八合目あたり、突然西の方から一陣の寒風が吹いて来たので“*O malvarmega!*”と叫ぶ筈だったのだが“*ma-ra-mga*”としか発音できなかった。ほつぺたが風のためにしやちほこばつたのである。その時ふと考えた。エスペラントはやはり頭から割り出した言葉である。“ものいえば唇寒し秋の風”を身に沁みる程味はっている東北人は“おおさぶ”(Oo, sabu)という自然語をもっている。“Oo samui”のような美し

さはないが、実感がこもって、しかも発音が容易である。“*O malvarmega*”とニセコの冬の山頂ではっきりいえる人があったら聞きたいものだ。こんな単語など、もう少く *Esperanto Akademio* が考えてくれてよさそうな事おやないかしらんと思ったわけである。

(高橋達治)



僕は身体をい
になる。

ゴオホはオラン
のゴオホは異物で
ある。その人のも
多すぎる位だった

オランダはレン
ベレた。彼はレン
現物の前には見る
の奥だけはレンダ

彼にレンダラン
若い時の黒い、美
等は愛しないわけ

素描も亦無類で
は果てないと彼は
風流とは言えない
てゆくが、しかし

発狂はむしろ当
本物を見ることが
氏は書いている。

Paul Cézanne
端にたとえらるべ

「アルルの娘」や
肖像」や「馬鈴薯

長が迷つてくれた
オ1冊に載っている

は英文で VINCE
(Kröllén-1

in England
二十八日はやが

たちの診療の結果
「きつと助かる」
とテオはいった。



ある友人からの 便り

中 沢 天 眼

僕は身体をいため、狂人じみてくれればくるほど、ますます藝術家に——創造的な藝術家になる。 — Vincent —

ゴッホはオランダで油画だけで百三四十、デッサンを二百以上見た。アムステルダム美術館のゴッホは^{みもの}見物である。又個人ですばらしいゴッホを油絵百以上、素描二百以上もつてゐる人がある。その人のものはアメリカに貸してあるので、全部見られなかったが、見られたものだけで多すぎる位だった。アムステルダムには九十五の油画と、二百を越すと思はれる素描や水彩がある。

オランダはレンブラントとゴッホを持つことをほこりとしてゐる。ゴッホにも自分達は全く感心した。彼はレンブラントと比較出来る藝術家であるかどうか知らない。しかし、その熱烈な表現欲の前には見るものは圧倒される。その真剣さには感心し、涙ぐむ。彼も孤独な男だった。その鼻だけはレンブラントに似てゐる。深い處で共通があるやうに思はれる。

彼にレンブラントの大きさを求めることは出来ないが、しかし端的に、実に強いものがある。若い時の黒い、美しいとは言へない画でも、その張さと真剣さとに、ぶつかってゆく圧力で、我等は愛しないわけにはゆかない。

素描も亦無類である。淋しさが全体にしみこんでゐる。其處で人々は効いてゐる。生きることには楽でないと言つてゐる。もつと生きることは彼にとって眞面目な務のやうに思へた。皆、風流とは言へない淋しみに耐へることを強ひられてゐる。彼の色は段々明るくなり、美しくなつてゆくが、しかし張り切った力は、ますます強まつていつても、ゆるくはならなかつた。

発狂はむしろ当然の結果だった。それ等のことは日本に居た時、知つてゐたことだ。だが沢山本物を見ることが出来た時、我等はそれをかく時の生きた彼の姿を見る。——と武者小路実篤氏は書いている。

Paul Cézanne を静流深淵にたとへるならば、Vincent Van Gogh は急流奔湍にたとへるべきであろう。友は複製でお馴染の「自画像」や「耳を切った男」や「糸杉」や「アルルの娘」や「郵便脚夫 Rubén」や「Dr. Gachet の肖像」や「Père Tanguy の肖像」や「馬鈴薯を食う人々」や「ヌエオンの小道」「ピエタ」などの偉作を見たことだろう。友が送つてくれた「^{サイヤイ}のある静物」は、最近出版された式場隆三郎氏のゴッホ画集（3冊）のオ1冊に載つてゐる。明るい感じの素晴らしい、いかにもゴッホらしい静物画だ。絵はがきには英文で VINCENT VAN GOGH (1853 — 1890) STILL LIFE ONIONS (Kröller — Müller Museum, Otterlo, Holland) とあり。Printed in England と印刷されてあつた。

二十八日はやがて暮れて行つた。フィンセントは少しも苦痛を感じないやうだった。ただ医者たちの診察の結果を知りたかつた。

「きつと助かるよ。」

とテオはいつた。フィンセントは強く首を振つて、「いや！ 助かるまい。悲しみは生きてゐ

る限りついでのだ！」

ときしげに答えた。

友になった。フィンセントはだんだん意識を失っていった。そして彼の最後の言葉は、オランダ語で次の如きものだ。つた。

'ik wilde dat ik zóó heen kon gaan'. (私はいま死にたいと希ふ)

かくて二十九日の午前1時30分、フィンセントは息をひきとつた。テオは遺骸の傍に泣き崩れて、いつまでも起きなかった。

朝のうちガッシエは、死の床に今は永遠に眠るこの哀れな友の死面を描いた。

かくてフィンセントの悩み多い三十七年の生涯は終りを告げた。しかも死後まなほ、ごたごたが彼の冷い遺骸の上にふりかかるのだった。

ささやかな葬式の準備にかかつてゐるとき、面倒が起きた。オーヴェルの僧侶のティシエが自殺者だといふ理由で柩車を貸さぬといひ出したのである。しかし役場にたのんでやつと貸して貰へた。

フィンセントは七月三十日に埋葬された。墓地はオーヴェル (Auvers) の教会に近い共同墓地であつた。数人の友が淋しい葬列に加はつた。その中にはエミール・ベルナルやペエルトンギイもゐた。ドクトルガッシエは感慨にみちた弔詞をのべた。それに対してティオは僅かに二言三言述べたのみで卒倒してしまつた。

フィンセントの墓には、ガッシエによって彼が生前愛した何は菰が手向けられた。(武場隆三著「ヴァン・ゴッホの生涯」から)

私の友人が Nederlando で Vincent van Gogh の傑作を見に行つたのは7月7日頃であるから、ちょうど Vincent の死んだ月にあたるのも偶然ながら不思議な因縁である。

私は来年の一月か二月に、この友人から親しい Vincent van Gogh の傑作の印象を聞くのが今から待ち遠しく楽しみである。

* エミール・ベルナル (Emile Bernard (1868—1941), フランスの画家。Vincent の親しい友で、死後とも交りぬ友情で Vincent の最初の展覧会を催し、伝記を書き、その手紙を Mercure de France (1893) に発表し、画集と書簡集を兼ねた *Lettres de Vincent van Gogh à Emile Bernard* (1911) を刊行し、Vincent が世に認められるに大きな貢献をした。

友は Amsterdamo でいかなる音楽を聴いたかは、この *bidkarto* を書いた日までにかればかれ自身の時間をもたなかつたので、書かれていない。

世界的に有名な Concertgebouw - Orkest の演奏が聴けたら良かったらうと思う。ただ Concertgebouw の正指揮者として40年ちかく活躍した名指揮者 Willem Mengelberg が一昨年老齢七十数才で逝去したため、その名演奏を聴けないのは友のために痛恨である。たしか友の *diskal bum*o の中に Mengelberg の名盤が2, 3枚あつた筈だから、.....

わたくしがここでもとり上げたい問題は、lingvostudo とほかの kulturoj との関連性 (rilato) についてである。わたくしのこの友人は専門の酪農方面のことに詳しいばかりで無く、文学、美術、音楽や演劇の方面にも相当の教養をもっているから、ヨーロッパに往つても

..... al 25 p.

△

まえか

UEA と

1952年5月

ない。これにつ

加えておられる

ため、今後の

試文を掲げるこ

尚 スターリン

ス、「辯証法的

1950年半ば

つかの手紙によ

1950年7

次の様に述べて

(引用文) オ

スターリンの

全世界規模にお

在せず、採取者

互の不信は諸民

同化の政策は清

能性をもつてあ

ることがありえ

尤し他が斗いの

らの民族諸から

っと望にされた

なるのである。

諸のすぐれた要

我々はあなた

における社会主

義の形式といつ

た言語問題に

於けるエスラ



モスクワの J.V.スターリンの公開状

S

朝比賀昇 訳

まえがき

UEA と SAT が共同で出した「モスクワの J.V. スターリンの公開状」は既に 1952 年 5 月のことではあるし、スターリンも今は亡く、もはや古典的な文献の一つかもしれない。これについては大島義夫先生が Samideano 誌 N-ro 19 (Jan. 1953) で批判を加えておられるが、原文を読み得る機会に恵まれない方も多し、UEA や SAT の考え方を知らるため、今後の私達の方針を決めるためにも無意義ではないと思うので おくればせ乍らあえて訳文を掲げることにした。これを一つの契機として 活潑な討論が起ることを希望したい。

尚 スターリン論文(言語学に関する)をお読みになりたい方は 1. 「作家への手紙」(イト書房) 2. 「辯証法的唯物論と史的唯物論」(大月書店) に訳文がある。

Aug. '53 訳者

1950 年半ば、あなたは Pravda に載せられ、後に Bolševik に転載された論文と幾つかの手紙によって、言語学に関する討論に加わりました。

1950 年 7 月 28 日附手紙の終りをあなたは国際語の問題に捧げています。そこであなたは次の様に述べている。

(引用文) オ 16 回党大会の演説中、諸言語の共通言語への融合に関する部分からとられたスターリンのいま一つの公式について云えば、ここで考慮におかれているのは別の時期、つまり全世界規模における社会主義の勝利ののちの時期である。この時期には世界帝国主義はもはや存在せず、搾取者階級は覆滅され、民族的及び植民地的圧迫は除かれ、諸民族の民族的孤立性と相互の不信は諸民族の相互の信頼と接近とによって代られ、民族的同権が実現され、言語の抑圧と同化の政策は清算され、民族の協調が確立され、民族語は協力^{協力}の形で自由に相互に豊にしよう可能性をもつであろう。これらの諸条件のもとではある言語が抑圧され敗北し、他の言語が勝利することがありえないことは理解し易いことである。ここでわれわれの問題となるのは、一つが敗北し他が斗いの勝利者となるような二つの言語ではなくて幾百もの民族語であるであろう。これらの民族語から諸民族の長いあいだの経済的、政治的および文化的協力の結果、はじめにまずもっと豊にされた単一の地域の言語が出来、その後で地域の言語が融合して一つの共通な国際語となるのである。これはもちろんドイツ語でもロシア語でも英語でもなく、民族語および地域の言語のすぐれた要素をとり入れた新しい言語であるであろう。(「辯証法的唯物論と史的唯物論」p.607 以下)

我々はあなたが云われる政治的見解に就て我々の意見を申そうとは思わず、殊に「世界的規模における社会主義の勝利」とか「社会主義」の内容そのもの、現在の二つの世界に於ける国際関係の形式といったものに就て述べようとは思いません。あなたが論文や手紙の中で触れている色々な言語問題に就てのあなたの見解も我々にとって関係がありません。しかし乍ら幾つかの国に於けるエスペラントの発展に対するあなたの手紙によるマイナスの効果を、我々は最近確認する

に到ったので尚更、我々は国際語に関するあなたの見地に就て適当な簡明な回答をあなたに送る義務があると考えます。

1.) 7月28日のあなたの手紙から、あなたは国際語の存在を否定するのみならず、現在に於ける国際語の存在可能性をさへも否定している、とゆうことが明に引き出されます。

この考えを食んだあなたの言葉は現実と反するものです。なぜなら国際語エスペラント——過去数十年それを用い現在用いている数多くの人達、沢山の識証や原作の文献、雑誌、ラヂオ放送、大会、会議、広い文通等々と共に——は存在し、ロシアのツァー政府やドイツのヒットラーがエスペを禁止し、独裁的、国料主義的政府がエスペを擧げたり睨んだりしている等のことがあったにも拘らず、既に65年を実際的に活動して来た。

2.) あなたは理論的に国際語の形式と出現を経済的、社会的、政治的、法律的制度（「社会主義の勝利の後」に——）即ち、あなたの云う「土台」や「上部構造」と結びつけている。

このことは1950年6月20日の論文に云われたあなたの見解と自家腫着に陥っている。その中であなたは言語は社会的現象であることを数回強調した。

「言語は一定の社会の中で、あるいは或は新しい土台によって、生みだされたのではなく、いく世紀にわたる社会の歴史および幾つもの土台の歴史の全過程によって生みだされたのである。」（p. 567 2.13）そしてあなたはイエ・クラシエニンニコヴァエの手紙の中でそれを精密に述べている。

「かんたんに云えば 言語は土台の部類にも、上部構造の部類にも入れることは出来ない」（p. 593 2.8）

とすれば、あなたの見解に従うと、国際語はその形成と出現の爲には *ad infinitum* 或る「新土台」や或る「新上部構造」を持たねばならぬとゆうのであろうか？

3.) 言語の階級の影響に就て質問しているイエ・クラシエニンニコヴァエの回答において、あなたは、階級は或る影響を持っていること、階級が言語の中へそれ独特の単語や表現を持ち込むことを云っている。そしてあなたは続けている

「第一に、このような特殊な語や表現は、また語義上の差異の事例は、言語のなかにはきわめてすくなく、やっと全言語材料のパーセントになるかならないほどである。したがつてのこり全部の圧倒的多数の語や表現は、またそれらの語義は、社会の全階級にとつて共通のものである」（p. 596 2.18）

現実には正しく逆である。最も進化した言語は今日約四十万の単語をもっている。（大オックスフォード辞典は414825語ある）シェクスピア——最も言葉に富んだ作家——は一万四千語以上を使って書いている。言語学者 M. Müller に従うと、19世紀にはまだ400語以上を知らない百姓がいる村がイギリスにあった！ 普通の人々は通常4000〜5000語を知っている。このことは、普通人の単語ストックはその言語の全単語数の凡そ1%であることとを意味している。そのことは更に、無知底をも含めて或る言語社会のすべての成員に本当に共通である単語の材料は、その言語の全単語ストックの1%よりも低いこととさえ多いとゆうことを証明している。他の99%のすべては別々の階級のみならず、職業、専門、またはスポーツや娯楽等の側面的なもの等々に属している。

科学や技術の過去数十年間の進化や、常に増大する専門化につれて、正にこの国語辞典の「区別的」部分（専門的部分？）は非常に豊富になった。しかし常に増加する国際関係のゆえに、この豊富化は普通主に国家的計画よりもむしろ国際的計画に一段多く起つて来たし起っている。

この国際的近似化

もの国際化、の通

った：即ち、人工

あなた自身でさ

使っている（即ち

あなたの論文全文

根が使われている

は国際的性質を持

このすべてのこ

(a) 人類の

て来ている。色ん

れを止めさせるこ

(b) 生活の

っている。どんな

いる言葉を使う外

例えばどこかのコ

ことの正しさが容

(c) この国

げるのに充分なく

的創造者ザメンホ

界に拓まった。

4) あなた

り、又——多分二

府のような「社会

思うに、そうなる

弾圧政治や「世界

である。——更に

にとって共通な一

である。

それに反して、

認することが出来

も進歩的な科学。

24日、ロムティイ

単なる可能性で

ム」(Voprosi

言語であるのみ

Akademiji

この様な事実

様なことがらが

我々がこの手

この国際的進化は——別な言葉で云えば色々な言葉の単語の材料のみならず表現の形式さえもの国際化の進程を容易に見ることが出来る。ヒットラー政府やそれを真似た政府は例外を作った：即ち、人工的に政治的、法律的方法でこの当然の進化を止めようと試みたのだった。

あなた自身でさえも、我々が今引用した小さな部分に於て国際的語根をたつた四行中に七回も使っている（即ち〔ロシア語の〕特殊な、語義的（二回）、パーセント、材料、塊、階級）あなたの論文全文中には、あなたが主題にしている問題に大に関係がある10～30%の国際的語根が使われている。しよつ中^{しよつちゅう}でくる接続詞や前置詞、ありふれた動詞など——もちろんそれらは国際的性質を持ち得ないものだが——を除けばその%はまだずつと高まるであろう。

このすべてのことは次のことを意味している。

(a) 人類の一般的物質的、精神的進化にもとずいて、言語は既に数世紀の間段々国際化して来ている。色々な政治的な力は或期間人工的にこの進化にブレーキをかけることは出来てもそれを止めさせることは出来ない。

(b) 生活の色々な方面——特に科学と技術——は既に言語的にも次の様に国際化してしまっている。どんな部門であろうと夫々の専門家は外国語で書かれたその部門の書物を書かれています。色々な言葉を使う外国人の非専門家がその本を読むよりも遙に容易に読むことが出来るのである。例えばどこかのコルホーズ員に、あなたの手紙から語義學に就ての部分を読ませてみれば、このことの正しさが容易に直ぐわかるであろう。

(c) この国際的な言語材料は、それに簡単な文法的形式を与えれば、真の国際語を作り上げるのに充分なレッキリした土台を示している。本質的には正しくそれをエスペラントの天才的創造者ザメンホフ博士がなしたものであり、彼の作品はあらゆる困難や反対にも拘らず全世界に広まった。

4) あなたが「社会主義の勝利」に就て語る場合、明にあなたは、現在ソ連に存在しており、又——多分ニュアンスの違いがあるかもしれないが——他の幾つかの国に現実化されている政府のような「社会主義」を念頭において理解している。

思うに、そうならば、その広大な空間の上に——あなたの言葉に従えば——既に「諸国平等」弾圧政治や「世界帝国主義」の綱領の一つである言語の同化の清算が現実化されていてもよい筈である。——更にあなたの意見に従えば——我々は少くともこの様な政府の下に存在する諸国にとって共通な一つの新しい「地域的」言語になつたための言語の融合の開始を期待してもよい筈である。

それに反して、数百万の非ロシア語民族にロシア語が義務的に教えられることを我々は確認することが出来る。同時にソ連の言語學者達はロシア語を「最も進歩的な文化の道具……最も進歩的な科学の道具……平和と進歩の言葉……偉大なる豊かな力強き……」（1950年5月24日、ロムティイェフ教授がイズヴェステイヤ誌にて）だと述べている。現在に於ける国際語の単なる可能性でさえも「帝国主義的イルジョウナジーの反動的イデオロギー、コスモポリタニズム」（Voprosi filozofiji n-ro 2/1949）の表現で攻撃している。ロシア語は「ソ連の言語であるのみならず、人民民主主義諸国の国際語でもある」（ヤコヴリエフ教授がVjestnik Akademiji Nauk SSSR n-ro 2/1950にて）と広言してはばからない。

この様な事実が何ものよりも明に物語っている様に思はれる。あなたの理論的説明よりも、この様なことから国際語に関するあなたの否定的な見解の真の原因をずっとよく示している。

我々がこの手紙で客観的に示した事実があなたの見解を変えさせるかもしれないとは思わない。

そんな目的で書いたのではなく、我々の見解を明にしたいと思つたのである。今後の歴史の進展がいづれに理があるかを示してくれるであらう。

1952年5月

ロンドン

UEA 委員長 國

パリ

SAT 遂行委員会

(朝比頓昇 訳 Feb. 1953)



エスペラントと 平和運動

ブルダ・ルドルフ
(チエッコ)

中川健一 訳

「血に飢えた奴の方へではなく……希望の聖なる旗じるしの下に平和の戦士が結集する」これは偉大なる先生ザメンホフによつて書かれた聖歌 (La Espero) の一節である。彼はその天才的著作をもつて彼が到達すべく希望した目的とその意義を明瞭に表現したのであつた。エスペラントは実にその理想を彼が人類にゆだねたものである。

今日我々の周囲を眺めて、我々は次のことを認識する必要がある。即ち多くのエスペランティストがまだ我々の言語エスペラントの意義を理解する能力をもたず、又創造者の理想をもわかっていないと云うこと。我々のうちの多くはエスペラントを全く無目的な無理想な唯の言語として使い、ザメンホフが何の爲にこれを著したかも知らず、ザメンホフがその理想を示した聖歌 (ラ・エスペーロ) を唱いながらも、その文句の深い意味については全く気付いていないと云うことである。

たとえ全人類が一つの国際語を話すようになったとしても、エスペラントの内部精神とその目的を知らず、相変わらず国と国との争いや又政治的・経済的権力闘争が続いているならば、ザメンホフの理想はまだまだ長い間実現されないであらう。

エスペラントは各国各民族が友愛によつて結ばれる爲の胎児を宿している。しかしながらエ

スペランティストがそのことに盲目であり、おしであるならばエスペラントには何の価値もない。エスペラントの内部精神とその目的を理解せず、又理解することを好まない人々は、それを理解し意識して活動しているエスペランティストにとつては無価値な石ころにひとしい。多くのエスペランティストはよくお互に “Samideano” (同じ思想のもの) と呼んでいるがこれはむしろ “Samlingrano” (同じ言葉を使う者) と言つた方が適當ではないか。何故なら多くのエスペランティストは、その聖歌の中に歌ねれて居り当然持つていなければならないところの思想についてさへ知つていないからである。

我々は皆平和の戦士でなければならない。エスペラントは美しい言葉である。人々はそれをよい目的のために、相互の理解のために、色々な物資や報告や経験、その他の交換のために役立て、時には結婚の媒介などまでも考えられる。しかしエスペラントの主たる最も聖なる目的は、ザメンホフがその聖歌の中に表現して与えたところのものに外ならない。

エスペランティストは人類殺りくを防ぎ、その罪を宣告するオー人者でなければならない。エスペラントはそのすべての権威をもつて人々が国際的敵対関係と戦争を起す前に常にそれを不可能にするために我々は役立つ者である。

エスペラント運動と平和ヨーゴ運動とは自ら

互にしっかりと結び
なら両方とも同じ目
衛のために斗つてい
運動家は色々会議
の相違が大きな
余り関心をもつて
ストの方は一つの
関係の結びにおい
しかしそこではそ
いので、その目的
ていて同じではな
この両面からそれ

エスペランティスト
様に結合させ、必
ならない。又一方
ティストが、彼ら
真鍮に望んでいる
る。そうすること
要問題は最も密に
利益を実現する

平和ヨーゴ者
も緊急の武器と
であり、エスペ
の平和斗争の列
国際的相互理解
めのエスペラン
ある。それらの
人類はその熱望
来るであらう。

今まで多くの
ると云う口実の
ることを拒否し

原

Mi ateo
verkafo
LEONTO
donos

gis



互にしっかりと結びつかなければならない。何故なら両方とも同じ目的のために、即ち平和の防衛のために闘っているからである。各国の平和運動家は色々会議を開くけれども、その時言語の相違が大きな障害になっていると云うことに余り関心をもっていない。その点エスペランティストの方は一つの言語による会議を行い、国際関係の結びにおいてはずでに強くなっている。

しかしそこではその内部精神に対する理解がないので、その目的、理想においては全く分裂して同じではない。我々の当面の目標は先づこの両面からそれらの障害をとり除くことである。

エスペランティストは各国の平和運動家を密接に結合させ、必要な相互理解を与えなければならぬ。又一方平和運動家は我々エスペランティストが、彼らと同じ目的の爲の共同活動を真摯に望んでいると云うことに信頼すべきである。そうすることによつてのみ、この二つの重要問題は最も密接に融和することに成功し互の利益を実現する希望となるであろう。

平和ヨーゴ者は世界平和の助けとなるべき最も緊急の武器としてエスペラントを採用すべきであり、エスペランティストは積極的にその国の平和斗争の列に入り、密接な共同斗争の中で国際的相互理解の是非必要であること、そのためのエスペラントの採用について説得すべきである。それらの行動を通して両方とも利益を得、人類はその熱望する平和を確実にすることが出来るであろう。

今まで多くのエスペランティストは中立を守ると云う口実のもとに平和運動に汚染に参加することを拒否していた。けれどもそのような中

立主義はエスペラントそのものの内部精神に対して罪悪を犯すものではないのか。ザメンホフの与えた目的に反するのではないか。そのような態度は我々の言葉を普及する上に重大な妨害となり、我々の運動に新しい友を引つけるどころか、かえつてそれらの人々を遠はらうことになるのではないか。

我々エスペランティストは今やその目的を知らねばならぬ時である。偽善的な中立主義を捨て、平和の戦士として結集せよ！

世界平和の保持の問題はすでに全人類によって動かされはじめている。世界のあらゆる部署で人々は平和のために闘っている。平和戦士の最も有能な武器は我々の腕の中にかくされ、残念ながら今まで不十分にしか使われていなかったに過ぎない。エスペランティストにそれを使う能力があつたならばそれはもつと有能な武器となつていたであろう。我々はそれをもつて真実の奇蹟を行うべきだ。

国々に夜明けがやつて来て、各地にエスペラント平和会やロンドが設立され成功的に働いているのが見られるようになった。それらは他国人との相互理解、経験や助言や展覧会その他の交換を行い傍観者の注目を引きつゝある。我々は我々の言葉を実際に応用してゆくことによってこのアミをさらに拡げるならば、世界平和の課題における平和運動とエスペラントとの融合に成功することが出来るであろう。

(「エッゴ」のエスペラント誌「平和戦士」より)

註、この翻訳は秋田エスペラント会機関紙 Verda Flago N-ro 4 から転載したものである。アンダーラインを引きたいところがここかしこにある

原稿募集

Ni atendas vian interesan
verkejon por nia eta gazeto
LEONTODO n-ro 9, kiun ni el-
donos en Frua Printempo.

Ĝis la 10-a de Marto



Se japana, Bonvole skribu
sur la paperon, nomata Gen-
kōjō ŝi.

Se Esperanta, Bonvole ne
embarasu nin pro malbona
formo de literoj.
En havo... laŭrola Longeco... laŭrola

緑星の由来

(4)

朝比賀昇

実際、《Lingvo Internacia》誌の1898年12月 No 36 に私達のエストニア人同志（エストニア人用の教科書2冊とエスペラントーエストニア語辞典との著者）によるこの広告が見られる。——《de Beaufront 氏の記述（《L.I.》誌1896 No 2 参照）に依ったエスペランチストのバッジを H. Stalberg, Rusujo, Estl.gur. Vezenberg, Peterburga str. 97 が作り、どこへでも送ります。ピン止めネチ（jetono）（このどちらが欲しいかを書き忘れぬよう）の附いた銀バッジを1.5ルーブルで、ブロンズ（銅製）なら0.5ルーブルで。どちらも金メッキ。ブロンズ製を今回は本当のウツ葉をまかけて作ったので定価を上げねばなりませんでした。各国のお金を受け取りますが、ロシア以外の切手は御容赦下さい。送料は別で、手紙とか小箱で送れるロシアなら14コペックから、外国なら20コペック以上かかります。》

次の号ではこの広告が少し変更されている。《外国のお金で払うこともできます。但しイギリス、フランス、ドイツ、スウェーデン、北アメリカ合衆国の貨幣のみ。第6号（1900年12月）で Stalberg 氏は云っている。《エスペランチストのバッジを 銀製だけ作ります。1ヶ1.5ルーブル（送料別）。銅製はもう作りません。》

1904年8月にカレー（フランス）とドーヴァ（イギリス）のエスペランチストグループがフランス自動車クラブ主催の La Manche 海峡におけるモーター・ボート・レースの機会に便乗して国際集會を行い、120人時にフランス、イギリスの同志達が集ったが、ベルギー、チェコ、ドイツの数人も参加した。この集會は

大成功だったので、辯護士 Alfred Michaux（アルフレド・ミショ）が自分の住んでいる Boulogne-sur-Mer（ブローニュ・シュール・メール）町を翌年の国際集會の場所として提案し、皆をブローニュでの一最重要集會に招待した。彼のこの提案は翌1905年に輝かしい第1回万国大会を華実としてもたらしたのだった。

この頃エスペランチストのバッジに対する幾つかの障害が現れ始めたので、Nancy（ナンシー）の Pourcines（ポルシネ）技師がこの Calais-Dover 集会で、《一定形式のシルシが採用されるべきだがアマトリ的なモデルに反対する人もある》と相談した。討論の



ち、最後に決論が出された。——《集會や旅行などの際着けるとよいエスペランチストの目シルシのマークは緑色五頂星である》

1904年9月の《L'ESPERANTISTE》誌の注意によると、丁度それは de Beaufront

氏が1893年3月の《Esperantisto》誌を提案したものであつた。

Joh. Dietterle 博士によつて編まれ Internacia Cseh Instituto de Esperanto から美しく出版された L.L. Zamenhof の《Originala Verkaro》（著作集）は456ページに Zamenhof 博士が1911年9月30日に《The British Esperantist》にあてて書き、1912年8月号に載せられた手紙を再現させている。《親愛なる諸君！ 私達の緑星の由来について私はもう今日ではよく覚えておりません。緑色に関しては Geohegan（ギャハガン）氏がある時私に注目させ、この時以来私の著作を緑表紙（目立たせようとは全然思いませんでした）で出版し初めたように思われます。私が全く偶然に緑表紙で出版した一冊の本を見て、彼は私にそれが彼の故郷アイルランドの色であるといふことを教えました。その時私の頭に 希望の

シンボルとして二
考えが落ちたので
それを de Beau
front のだつたように
私がそれをマーク
の考案の組合せ
珍しいことと
matiaadis 博

et 18 f.

自分の時間をその
ロツパに行つた
の悔を残すだけ
無い。不始の努
怠らず解めて、
いまは大部改
て、専門以外の
に徹することは
一貫として甚だ

Esperan
ることは何よ
zikoj x te
Lingvost
通して、当然
だけを物にす
ある。レカレ
るのではない

シンボルとしてこの色を視ることができる。という
考えが浮かんだのでした。五頂星に関しては、最初、
それを de Beaufront 氏が自分の文法に印刷し、
たのだったように思われます。それは私の笑に入り、
私がそれをマークとして採用しました。のちこれら
の考案の組合わせによって線の星が現れたのです。」

珍しいこととして私は Ana kreon A. Sta-
matiadis 博士の興味ある訳作 (《Helenfa

Esperantisto》誌 1951 年 Nr. 164
165.) に読まれることを附け加えたい。
《お互に固い友情と相互扶助、永遠の同
胞愛を予告している》 Pitagoranoj
(有名な古代ギリシヤの哲学者ピタゴラス
の後継者達) が用いているマークは、《
奇しくも、五頂の緑星であります。》

(おわり)

e2 18 f.

自分の時向をその方面の観賞に費すことができるのだ。もしもそれらの教養を身につけずにヨー
ロッパに行ったら、折角美術館や劇場に案内されても、室の山に入りながら手を空しくして帰る
の悔を残すだけだろう。ただし文化的教養を身につけるといことは一朝一夕にできる問題では
無い。不当の努力によって、恰も蜜蜂がいろいろの花から蜜を採取して巣房に運ぶように、毎日
怠らず努めて、できるだけ多くの書籍類を渉るより外に方法が無い。

いまは大部改まって来ようだが、日本の専門家は 専門の部門にだけどっかとアグラをかい
て、専門以外の事には一向無関心である、と云った態度をとる人が多かったのではないか。専門
に徹することは大いに結構だが、専門以外の事には全然風馬牛であると言うのでは、文化国民の
一員として甚だ不面目なことでは無かろうか。

Esperanto を Lingvostudo としてやっているわれわれは語学そのものの習得に努め
ることは何よりも大切なことであるが、それと同時に一応は Eŭropo の belantoj や mu-
zikaĵoj や teatraĵoj のせめて概観にだけでも通じておくことが必要だろうと思はれる。

Lingvostudo が単なる語学だけでしかないのでは無いとしたならば、われわれは語学を
通して、当然何物かを獲得しなければならぬ。しかしそれまでは、われわれはただ「語学の「量」
だけを物にすることに専心すべきだ、これが komencanto に課せられるたゞ一つの問題で
ある。しかし komencanto の時から上掲の事を心掛けた方が、後になってその人の爲めにな
るのではないかと、頭の良い私には思はれるが」 じんなものだろう? (終)

註、この verbe=stoj は花澤礼太郎氏、この skribaĵo は N-ro 7 かいの
続きです。

Dankon pro viaj helprortoj al ni!

Ricevitaj kartoj : 秋田エスペラント会、関西大学エスペラント会、小田原エスペラント会、広島一田中氏、

Donacitaj organoj : Rinero (広島エスペラント会)、La Morado (関西連盟)、VERDA FLAGO (秋田エスペラント会)、Verda gardeno (高田エスペラント会)、

あとがき

相変らずの内容である。最近の日本の Esperantujo の organoj は極めて低調不活潑である。関西連盟の organo, La Morado はその毒舌録 (N-ro 32) の中で云っている「これをもらったら必ず亡びるというありがたい機関誌賞が今年はいくつかの LEONTODO へ。Lumo 消え、Torĉo 滅し、Espero 地におちた今日、はかなく夏の Leontodo と散り果てぬよう、御用心、御用心。さても新生の「EVA」や「題名のない機関誌」(学生)に物申す。機関誌賞をもらねぬ程度に大いに頑張るべし。」聞きようではすいぶん失礼な言草ともとれるが、しかし関西人の迷信とはかりでは片付けられぬものがそこにある。何故機関誌が次々と出来ては消えてゆくのか考えてみる必要がある。機関誌は低調だが運動は活潑である、とは考えられない。機関誌を見れば、そのエスペラント会の傾向も消長もわかるというものである。

organo がつぶれる原因は原稿が集まらぬ、会費も集まらぬ、気が揃わぬ等であるがそれらはもちろん不熱意の反映である。不熱意がなんであるか、とひらきなおられると困るが、要するに Esperantisto であるうちは Esperanto に真剣であつてほしい、といいたいのである。

LEONTODO の会費値上げはいろいろな事情からやむをえないことと思う。経済的に困難な人はせめて 30 円でも抜かしていただきたい。餘裕ある方はもちろん毎号 50 円づつをお願いしたい。従来会費はほとんどわづかだつたのでいろいろとつらい目にあつています。原稿は充分推敲してから出して下さい。(Y)

LEONTODO N-ro 8 (隔月刊)

発行 1953 年 12 月 22 日

印刷・編輯人 山本昭二郎 (小樽市住今江町九ノ八
振替小樽 20406)

発行人 小樽エスペラント校会
小樽市花園町東 3-11 山賀眼科医院内

会費 30 jenojn (含送料)

Projekt

12月13日、山本昭二郎氏を
が提議され、次の

1. 来年度の

1) 例会は

2) 更に講

千秋、北

を充実さ

活動に参

2. 1954

(収入) 賛

正

学

(支出) R

L

R

L

通

会員が

らいの会

になって

又は会長

3. LEO

ZEON

たし発行

1) 委

原稿は

5部以

4. 火

6.30

7.00

7.30

8.30

5. 役

輯=

INFORMILO de H.E.L.

Projekto de Nia Movado en 1954 OTARU Esp.-ASOCIEDO

12月13日、山賀先生宅で1953年サメソホ祭を南きました。山賀先生、小橋に久しぶりに帰られ北島氏をはじめ15名の同志が参会し、たのしい午会を過ごしました。席上多くの projekto が提議され、次のことが決定されました。

1. 来年度の運動内容

- 1) 例会は毎週火曜日午後6.30から9.00まで南き、下記の要領で行う。
- 2) 夏に講習会と展覧会を行う。 3) R.O.をエスペラント宣伝のため市内三高校(札幌、千秋、北高)に寄贈する。 4) LEONTODOの出版をもつと計画的に行い、一版内容を充実させ、又此を全国25学会支部に寄附する。 5) その他 H.E.L., J.E.I.等の活動に参加し、エスペラント運動を盛にする。

2. 1954年度予算

(収入) 賛助会員 $7^{(名)} \times 150^{(円)} \times 12^{(ヶ月)} = 12,600^{(円)}$
 正会員 $10 \times 100 \times 12 = 12,000$
 学生会員 $3 \times 50 \times 12 = 1,200$ 計 26,400円

(支出) R.O.購読費 (上記会員別に支払一前払) = 14,200^(円)
 LEONTODO 購読費 $20^{(部)} \times 200^{(円)} = 4,000$
 R.O.寄贈費 $3^{(部)} \times 600^{(円)} = 1,800$
 LEONTODO 寄贈費 $25^{(部)} \times 200^{(円)} = 5,000$
 通信費 雑費 = 1,400 計 26,400

会員が多ければ多いほど私達の活動は *rigla* になるのです。図書購入費などが20名くらいのお金からではできませんし、上の予算で全くぎりぎりです。一人でも多くの同志が会員になって下さるようお願いいたします。尚、会計係は北海道運局人事課前田幸一氏ですか会計係又は会長に毎月25日頃迄に会費をお納め下さい。

3. LEONTODO について

"LEONTODO" を発行するために従来山賀氏や山本氏の負担が過大で経済的にも困難でしたし発行も不規則でありましたので、この欠点を是正するために次のように決めました。

- 1) 季刊発行 冬(12月15日) 春(4月15日) 夏(7月15日) 秋(10月15日)
 原稿は発行日の一ヶ月前迄に火曜例会又は山本昭二郎氏へ。 2) 購読費は1部50円、5部以上は1部当り40円、10部以上1部当り30円

4. 火曜例会は下記の要領でやります。時間に遅れないように多数御参集下さい。

- 6.30 ~ 7.00 (p.m.) 初等講習者のための時間
 7.00 ~ 7.30 会話練習
 7.30 ~ 8.30 初等、中等読物を共同でよむ会 ("Karlo" を予定しています)
 別に会話を練習する会
 8.30 ~ 9.00 Babilado kaj Informo (konsilio もこのときやります)

5. 役員改正 会長=山賀博士 図書係=山賀斎藤 会計=前田、河野 Le 誌編輯=山本、土田 初等講習教師=高橋、土田 連絡係=(市内)前田(各地)土田 (H.E.L.) 高橋、河野 鈴木 (J.E.I.) 早川

大会に出席して

星 田 淳

四月に九大を出ると共に、今迄つづけていた Esp. の仕事からは自然に絶縁したようになってしまい、心ならずも殆んど Esp. の本もよまない生活がつづいていました。それだけに 10 月の小樽の大会は前から心待ちにしていたし、当日は久しぶりに多くの samideanoj と共に色々とおしゃべりして、実に愉快な一日を送らせていただいたことを皆様に御礼申し上げます。

そのように愉快になってしまったため、初めて参加して皆様には初対面の席上つい出しやばつて歌つてみたりしやべつてみたり、お耳を汚したことをお詫し下さい。Esp-isto が Esp. から離れているのはさびしいものですから。福岡で去年のサメンボフ祭の時でしたが、集会を終えて junaj gesamideanoj だけ残っていたところへ、「俺もむかしやつたことがあるんだ」と ebrieta viro がとびこんできて、片言の Esp. をしゃべりまくり、炭鉱の人だつたので丁度スト中の炭労の支援も要請して（実はこちらが目的で廻っていたらしいが）上機嫌で帰っていった。その事を思い出して、その人の気持ちがわかるような気がしました。

私はまだ北海道の Esperantujo については殆んど知らずこれから皆さんのお世話になるわけです。よろしくお願い致します。

感じたことを若干

もとより私は今度の大会が北海道の Esperantujo への初見参というわけで何もわからなかつたのですが、あの Laborkunsido で一体何がきまつたか、何が討論されたかを考えてみると、いろいろな点ではつきりしない点が沢山あつたように感じました。北海道 Esp. 連盟があるということは前々から聞いていましたが、その組織、地方会との関係等についてもどうもはつきりした討議がなかつたように感じました。もちろんこんなことは急場の形式的でつち上げでやるべきことではないと思いますが。九州においては、地方会はすべて連盟に入るという原則でほとんどの地方会が加盟しており、会員一人当り月いくらというようにして、連盟費を連盟に出すという形になっています。肉面連盟では機関誌 La Movado の読者をすべて連盟員として各地方会に地方会としてまとめたような形、従つて Movado の誌代即ち連盟費のようになっていきます。ここ北海道ではどんな形で全 Esperantistoj の団体としての Ligo を育てていくか、すぐこうと出来ることではないにしても、今後の方向位はもう少し皆で考えてみてもよかつたのではないのでしょうか。Leontodo を機関誌という名にするかどうかについても固苦しいものにしたくないからしないということになつたようですが、機関誌というものは固苦しいものという定義はどうかと思いました。機関誌というものはある団体の宣伝と、anoj の連絡に当るものでしょうが固苦しく読みづらいものではその役に立たないでしょう。舊日本大会でも、又、九州大会でも、大会前に各議題は地方会にプリントとして送り、地方会としての意向を一応とりまとめさせるようにしていましたが、そうすれば議

事も円滑に
一考下され

Esp. te
快な気分
ないでし

オ/7回
開催され
午前9時
続いて Esp
した。先
上京して帰
せられた人
藤代三氏
るものをカ
ウツクシ

Grande
と以上の
加藤孝一
氏と続

午前11

る decia

Propo
Decia

Propo
Deci
Propo

Deci
Prop
Deci

事も円滑に進むのではないでしょうか。いろいろ勝手なことばかり書きましたが御
一考下されば幸です。

Esp. teatraĵo, ハーモニカ独奏等充分に楽しめましたし、港内一巡も実に爽
快な気分でした。一日の日程では、これ以上の懇親の機会がなかったのは止むを得
ないでしょうか、一寸残念でした。

— 大 会 報 告 —

第17回北海道エスパーント大会は10月11日午前9時より、小樽市労働会館にて
開催されましたが、次にそのもやうを報告致したいと思います。

午前9時、札幌、由仁から同志が相次いで到着。小樽、高橋氏立って開会を宣言し、
続いて *Espero* の斉唱あり、大会議長に札幌の相沢氏を選出して 開始されま
した。先づ各方面から大会によせられました *Mesaĝo* 及び *Saluto* の披露に入り、
上京して帰格したばかりの小樽、早川氏立って *S-ro Toki* と *S-ro Miyake* から寄
せられた *Mesaĝo* を読みあげ、又道内の同志、函館の吉田栄、小田島栄両氏、札幌の有
藤龜代三氏、辻靖子さんからの手紙による *Saluto* も紹介されました。祝電の主な
るものを次に紹介致しますと、

ウツクシイセカイノタメニ タイカイバンザイ 函館 井上一氏

Grandan Sukceson kaj Koran Saluton 幾春別 岡本氏

と以上のとおりであります。続いて各地代表の *Saluto* があり、札幌からはアリマ、
加藤孝一両氏、由仁からは新田氏、小樽から山賀博士、苫小牧から参加された星田
氏と続々立って挨拶されました。

午前11時より大会議事に入りましたが、次にその時の *propono* とそれに対す
る *decido* を掲げます。

Propono LEONTODO を全道 *Esperantisto* の *organo* としたいか。

Decido 1. 単なる *gazeto* としておく。

2. H.E.L *gazeto* とせず全道 *esperantisto* に解放された小樽
の *gazeto* とする。

3. 連盟の記事をのせる欄をつくる。

Propono 連盟本部を札幌に移したいかどうか。

Decido 札幌にうつす。本部を札幌市上白石二区祖澤澤治雄氏方におく。

Propono 小樽に定期 *Sveda kaj Angla Sipo* が来るが、その *Esperantista*
Maristo を来年度の9月の大会に歓迎するか。

Decido 連絡がつけば歓迎する。

Propono 明年度の大会を何時何処で開催するか。

Decido 場所は札幌 時期 7月中。

議案を終って役員を改選し会長に相沢氏を選出し、他の役員は会長が任命することと定め、午前中の議事を終了した。

昼食後午後1時再開。出席者一同自己紹介の後、引続き余興に入り、各自打とけて話の花を咲かせた。又、三石、星田、児玉氏等の Kamato、高橋氏と前田氏との Komedi o、斎藤翠氏のハーモニカ独奏など、多彩な催しものがあった。終って会場玄関に打揃って記念写真を撮影。午後3時、一同 Tagig o を斉唱し、労働会館を引きあげ、海員学校の「しらかば号」で港内見学を行った後、午後4時小樽駅において解散した。(前田)

○大会席上に於ける各地報告

札幌 5月～7月の講習で十数名の会員を得た。エスペラント展覧会をやろうと思ったが出来なかった。(アリマ氏)

由仁 岩見沢にエスペラント 宣伝を考えたが会場が見つからずいろいろの都合で不可能であり、由仁における講習会も開けなかった。しかし、目下岩見沢に活動をのばそうとしている。(新田氏)

小樽 5月～7月 初等講習。Leontodo が Premio を日本大会で受けた。5月講習会に先立ちエスペラント展覧会。高橋氏 Usuno へ向け航海。帰る。佳山さんによって翻訳された北国の物語ラヂオを放送。(山賀博士)

大会参加者 敬称略 △印は欠席参加

○札幌

アリマ・ヨシハル

札幌市北24西9

西里 静彦

南16西5

新井 静太郎

大通 西13

加藤 孝一

南1西1北星映画支社

相沢 治雄

上白石町2区

児玉 広夫

北12東2 西村文男方

早坂 基

南2西25 郵政高建築課

森田 俊雄

北15西2 岩間実方

高屋 宜子

渡辺 由美子

南4西5 札幌別院

高木 敏子

辻 靖子 △

南23西8

高橋 要一

大通東8-1

○小樽

山賀 勇

小樽市花園町東3-11

山本 昭二郎

住1江町9-8

山口 俊也

(小樽海員学校内)

高橋 達治

汐見台町海員学校内

江口 音吉

奥沢町4-22

前田 幸一

花園町西2-17

鷺田 ミチ子

新光町128

佐々木 俊一

桂ヶ岡 184

殿坂 圭治

入舟町4-4

佐藤 忠孝

長橋町22

佳山 やす子

花園町西2-21

鈴木 政次

稲穂町東1-6

早川 昇

緑町2-2

斎藤 翠

花園町東2-12

小黒 一弘

稲穂町東8-16

○由仁

新田 為男

ア張郡由仁町字三川

泉谷 昭典

字川端

外山 雅子

字由仁

成松 富子

字熊本

○その他

星田 淳 苫小牧局区内北光寮
 三石 清 東京都武蔵野市吉祥寺 2458
 小田島 栄 △
 吉田 栄 △ 函館市船見町43

以上 36 名

大会収支決算

(1953. 10. 18)

(収入の部)

前年度繰越金	270.00 ^円
運営資金(借入)	3,000.00
会費(34名)×150 ^円	5,100.00
寄附	3,180.00
雑収入	300.00

11,850.00

(支出の部)

当日書食代(31名)×80 ^円	2,480.00
写真代(35枚)×80 ^円	2,800.00
通信費	1,425.00
ホート謝礼	1,000.00
会場使用料	680.00
借入金返済	3,000.00
雑費	425.00
翌年繰越金	50.00

11,850.00

(寄附内訳)

札幌エスパラント会	500 ^円	江口音吉氏	300 ^円
吉田栄氏	200 ^円	早川昇氏	100 ^円
池島与三吉氏	500 ^円	高橋達治氏	100 ^円
山賀博士	1,380 ^円	前田幸一氏	100 ^円
		計	3,180.00

○註 雑収入は会費150円を超過して払っていただいた超過分の累計。

(以上 前田)

☆ ZAMENHOFA FESTO en Sapporo

サッポロのザメンホフ祭は19日17時から21時、北海道町村会館(1a15a Kongreso de H.E.L 1951の会場)オス会議室で、相沢、木村、アリマ、高木、児玉、早坂、三石、西里の5-roj 及び f-ino 小原の9名によって gaja に開きました。札幌エスパラント会の会費は未定。H.E.Lの役員は次のごとく決定しました。委員長 相沢、委員 山賀、アリマ、新田、他に Izolita Samideano (昨年の大会で決定した通り)5人と決定しました。(以上アリマ氏)

◎ 尚、由仁エスパラント会の Z 祭は12月22日現在まだ行なわれていない。しかし22日以降に早急に開く、とか。